

東日本大震災と子どもたち

東日本大震災におきまして犠牲になられた方々のご遺族の皆さま、被災された皆さまに心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

東日本大震災、さらに原発事故の影響が続く中で、大きな被害を受けられた学校、児童生徒、保護者や教職員はじめ多くの方々が、復旧・復興に向けてさまざまなとりくみをしています。

児童生徒たちが受けた被害、気持ちの変化や心のケアに向けて、教職員が全力を尽くしている教育活動と、教育相談員が感じた被災者の心の変化や動きをお伝えします。

津波の時も、これからも てんでにたくましく！ 支え合い生きていくことを忘れずに

宮城県石巻市立雄勝中学校教諭 瀬戸 千恵子

3月11日この日は卒業式、感動に包まれた最高の日でした。しかし、津波は、生徒から大切なものを根こそぎ奪っていきました。卒業生を見送り、生徒がいなくなった校舎に、激しく長い揺れの地震が起こり、「大津波警報6メートル」の放送が響きました。校舎屋上が津波時の避難場所でしたが、校舎倒壊の恐れありと判断して、キャンプ施設のある森林公園に我々教職員はすぐに避難しました。

生徒たちは無事避難しているのか。実際には、3階校舎屋上を越える高さの津波が地震の40分後には押し寄せ、地域の避難場所を飲み込んでいました。生徒たちは家庭に帰り、自宅でテレビを見ていたり、遊ぶ約束をして待ち合わせていたりしている時でした。「津波の時ではてんでに（それぞれが自分の判断で）逃げる！」の言葉通りに、生徒たちは行動しなければなりませんでした。

道路や連絡手段も寸断、車は流され、車があってもガソリン不足の中、避難所を教師たちが回り、「77名生徒全員無事」の確認ができたのは、地震発生から8日目の3月19日でした。壊滅と表現される地域の状況からは奇跡であり、心から喜び合いました。

安否確認に訪れた時に、生徒や保護者からは、「中学校はどうなりますか」「学校の場所にあわせて、住む場所を考えたい。」という声が寄せられ、避難している生徒が多い地区の中学校に仮設職員室を設け、学校再開に動き出しました。

ほぼ全員が自宅流失、命以外はすべてなくしている生徒たちに、「いつでも職員室において」「毎週木曜日を登校日」と呼びかけ、校庭での運動やプリント学習を用意して、生徒や保護者が集う機会をもちながら、生徒のケアに当たりました。「登校日に行くたびに、笑顔がみられるようになった。」（保護者談）

4月1日の人事異動は予定通り行われることになり、地域とのつながりの要の教頭先生、生徒の心身のケアにあたってきた養護の先生の離任式を行いました。県外に避難した生徒や保護者以外ほぼ全員が集い、再会を喜び、転出する先生方、送り出す校長先生の身を切られるような言葉に、号泣し合いました。

同時に、「〇〇高等学校の校舎の4階で学校を再開します。学用品の心配はいりません。ぜひ、生徒をよこしてください！」と校長先生が訴えました。

再開するとはいえ、生徒の半数以上が避難所から通学し、パンやおにぎりでの1日2食、夜9時に消灯の生活がいつまで続くかわかりません。「上靴を下駄箱に入れて出迎えたい」「部活動ができる環境を整えて、学校で放課後も活動させたい」「温かい食べ物を食べさせてやりたい」など校長先生自ら支援を呼びかけ、全職員で準備に当たりました。

当初半数以上が転校を検討していましたが、現在52名在籍で、「たくましく生きよ」の校訓のもと、4月21日から、学校生活を再開しています。

「もうテニスはできないかと不安でした。

用具や給食支援のおかげで、部活動に打ち込むことができました。」(3年女子生徒談)

津波時に、各自が判断して避難したように、津波後の学校再開まで、地域や学校によって被害状況や必要な支援は違います。生徒や保護者の声を聞き、「生徒のために」という思いを教職員と共有し、明確な方針を示した佐藤淳一校長先生の存在は大きかったと感じています。

3ヶ月を過ぎる頃から、津波当時のことが生徒の日常会話から聞こえてきました。「寝言で逃げろと叫んでいて、今朝のどが痛くて目が覚めた。」(1年生男子談)「あの時は、すごい腹が減って賞味期限1年過ぎたのも食べたよ」(3年生男子談)「生徒のために」と寄せられた多くの支援、駆けつけてくださる多くの人の存在により、生徒たちのお腹や学習環境が、何より心が満たされています。

癒えない悲しみや不安を抱えながらも、「人

は支え合い生きていく」という財産を生徒たちは受け取りました。生徒たちは「どこでどのように生きていくのか」てんでに(一人一人が)、自分の夢や希望を問い直し、歩いていきます。

今後、国や県、市の復興計画や方針が示され、地域の復興とともに学校のあり方が問われます。学校・教員として「てんでに(生徒や保護者の願いや現状を把握し)行動する。」ことが問われ続けていくと感じています。



入学式 4月21日
全校生徒の記念撮影

ぼくって、どうしてここにいるの？

(原発被害により、余儀なく転校という形に)

福島県いわき市立T・G小学校教諭 H・N

はじめに

福島県内の小・中学校では、3月11日の大地震による津波、原発事故の影響のため臨時休校が続きました。そのような状況の中、4月6日に始業の運びとなりました。どこに誰が避難しているのかわからないままでのスタートになり、大変驚きました。

私の学級は、特別支援学級(知的)で6年生が卒業し、2名が在籍している学級でした。4月になり突然、被災した子どもが2人入級するということが一原発30キロ圏内で避難をしなければならない子どもたちになりました。大人も理解できないほどの地震、津波、原発の事故となり、本人たちは訳もわからず引っ越しをしてT・G小学校に転校することになってしまいました。ここでは、その子どもたちにどう関わってきて現在どのような状況で、何が課題だったのかを考えていきたいと思います。

もし、災害がなかったら？

A児(男児、ADHD、自閉的傾向)は、特別支援学級のない学校に入学する予定でした。そのため通常学級に入級し1~2校時は、個別で国語、算数の学習をする(別室で1年生の内容を退職なさった先生が教えてくれる)、3~5校時は、通常学級にいるが支援員がついてしっかり支援をしてもらう、という「集団で生活をし、個別で学習をすすめる」しっかりとした構想ができていました。

B児(男児、てんかん、知的障害)は、前の学校でも特別支援学級に入級していて、児童数は2名に担任と支援員がついていて生活・学習等でとても恵まれていた環境でした。

しかし、震災後・・・

A児について、4月初～

父親の仕事場所もかわり(単身赴任になる)避難所からアパートへと住居もかわり、母親

と双子の姉（通常学級に在籍）とA児の3人での生活がスタートしました。地震の影響で不安定な気持ちでいるのに、友だちの全くいない学校に入学。母親に車で送ってもらって登校するが、母親から離れるときに「ママー、ママー。」と泣き大騒ぎをするということが5月末まで続きました。自閉的傾向があるので、嫌だと思ったことは、全くやろうとしないということは今も続いています。

B児について

避難指示が出て住居が変わり、母親は仕事を続けているため忙しい毎日のようです。どうして家が変わり、学校が変わるのかについて本人は理解できない。かわった環境についていけない。教室では、ボールを持って学習中でも「あそぶんだ、あそぶんだ。いいんだ。」と言いながら、うろうろうろつくだけの日々が続きました。

余震が何度も続いたが、余震のたびに大騒ぎをして「だいじょうぶだね。だいじょうぶだね。」と言って担任のそばに泣きついて寄ってきました。

担任一人で4人をみる状況が続き、B児になかなか充分関わる時間がもてずにもどかしい毎日でした。

集団で楽しめることを実践しました!!

①蒸しパンをつくろう 6/3

特別支援学級2クラス合計8名+先生方で、蒸しパンをつくって食べる。手でこねてトッピングをして蒸しあがったホカホカおいしいパンを食べました。みんな幸せ一杯の顔をしていました。

②葉っぱをつけない「柏餅」づくり 6/17 (放射能が心配なので・・・)

米粉をねってあんこを入れ、ラップをして蒸して食べました。その後に楽しいゲーム(ハンカチ落としや椅子取りゲームなど)もやり盛り上がりました。

③ロケット公園に行ったよ 6/30

運動会や遠足等の行事がカットされたので、近くの「ロケット公園」に行くことにしまし

た。おやつと飲み物を持って、遊具で思いっきり遊ぶことができたととても楽しかったようです。

④おかしづくり 7/15

きじをねって平たくして形をくり抜いて、オーブンで焼きました。かわいいクッキーができておいしくいただきました。

⑤すいかのゼリーパンチづくり 7/19

すいかをくり抜き、ゼリー、果物を入れてそれぞれ好みの物をとって食べました。暑い日だったので、とてもおいしくいただき1学期のしめくりとなりました。



さいごに

誰もが予想できなかった地震、原発事故で転校しなければならなくなった特別支援を要する子どもたちの受け入れ先では、その子が困らないように最善を尽くそうと努力していますが、なかなかその子に関する情報が得られず「もどかしい」月日の流れを感じ、関わりに苦慮しているところです。B児に関しては、文字の獲得（読めない、書けない）指導法など細部に渡り知りたかったが、全く情報がなく大変でした。個別での支援員をつけて欲しいと要望している所です。

A児に関しては、知的には問題ないため知的の学級ではなく情緒学級での学習が適していたが、それも場当たりの知的学級に入級したために学習に支障があったように思われます（兼務の先生がいるので何とかやっていますが・・・）。

以上のように、どのような時でも特別に支援を要する子どもたちが「おいてきぼり」にされないように一人ひとりを大事にし、毎日の生活に「笑顔」が見られることを願っています。

震災から140日

岩手県宮古市立崎山小学校教諭 下瀬川 里志

被災状況について

7月29日、震災発生から140日、崎山小学校は夏休みに入りました。この間私たちが何より心がけたのは、子どもの変化を見逃さないこと、そして、特に被災した子どもや保護者に寄り添うこと、でした。

本校は岩手県宮古市中心部から北へ約6km、児童数約200名、PTA会員数約140名、教職員数15名の学校です。学区のほとんどが海拔50m以上の丘陵地なのですが、主に漁業を営む集落が5つ海岸部にあり、津波により大きな被害を受けました。

地区全体では、全壊148戸、浸水まで含めると200戸近い家屋が被災しています。小学校の関係では児童19人13家庭が被災し、亡くなられた方・行方不明の方が5人います。教職員では4人が住まいを失いました。

3月11日、そして学校再開まで

3月11日、激しく、そして異常に長い揺れ。幸い子どもたちにけがはなく、また校舎にも被害はないようでした。校庭に避難させた後も間断なく地震が続き、怖くて泣き出す子が何人もいました。気温がかなり下がってきたため、担任の先生方は余震の中教室に戻り、子どもたちの防寒着を持ってきました。

学校から海までは直線距離にして1kmほどなのですが、地形的に沖合が遠目に見える程度です。だから、子どもを迎えに来た保護者から話を聞くまで、津波が来て大変な事態になっているとはわかりませんでした。

本校の体育館は市指定の避難所になっており、当日は240名ほどの方が避難してきています。その中にはまだ保護者が迎えに来ない子が10名ほどいました。不安でいっぱいの子どもたちを、女の先生方が身近に置き、一晩過ごしました。最後の保護者が迎えに来たのは翌日の昼頃でした。

避難所の立ち上げの際には教職員が働きましたが、数日経つと避難されている方々が自主的に運営できるようになりました。

そこで私たちは、子どもたちの家庭状況の把握と、新年度計画の検討、そして卒業式・修了式（隣接の中学校体育館を借りて）の準備を進めることとなります。

避難所である体育館に入った子が12人。親類の家に身を寄せた子が5人。また、15の家庭で被災した親類の方が避難してきていること、8つの家庭で親類の方が犠牲になったこと、10人の保護者が職を失ったこと等、被災していなくても、状況が大きく変わった家庭が多数ありました。

さらに、津波に流された自宅を見てショックを受けた子、地震を極度に怖がる子、親に甘えるようになった子、突然おしゃべりになった子など、大きな不安感を持っている子が少なからずいることがわかりました。友だちが内陸部への一時避難からそのまま転校ということになった学級は、ひどく落ち込んだそうです。

4月25日、通常より3週間遅れでの始業式・入学式。始業式は校庭で、入学式はまた中学校体育館借りて行いました。新入生27名のうち6名が被災した家庭の子で、他地域から引っ越してきて本校に入学という子がいました。また、転入生が2名ありました。

震災発生当時に在籍していた子は、幸いにも津波を見ていませんが、新入生や転入生の中には、津波が町を破壊する様子を見ていたり、津波に追われながら逃げたりした子がいました。自分が見た、津波に巻き込まれた家屋や人の様子を家で絵に描いたそうです。

担任配置は、昨年度の1～5年担任は持ち上がり、6年担任が新年度の1年担任になりました。子どもや家庭をよく知る者がケアにあたるようにするためです。また、震災加配で教員が1名増となり、入門期指導も含めて1年担任のサポートをしていただくことになりました。年間行事は、1学期分は延期したりカットしたり、2学期からはできるだけ通常の日程・内容で、と確認しました。

子どもたちは明るく元気で学習にも意欲的、担任の話をきちんと聞く態度もできていました。ただ、避難所で暮らす子の中には、爪かみが止まらなかつたり、非常に落ち着きがなかつたり、些細なことで泣き出したりという子がいました。遊び時間に他の子にとけ込めないように見える子もいました。家族を亡くした子の中には、ぼんやりしていることが多かったり、何かのきっかけでその話を始めたり、という子がいました。

高学年の学級では、やんちゃな子が不用意に津波の話をするのをたしなめることもあったそうです。転入生は、それぞれの学級でごく自然に受け入れられました。子どもたちは何を言われなくても、津波を遠ざけていたのかもしれない。

担任の先生方は、意識的に学級を明るく楽しい雰囲気にする、被災した子が話すことをじっくり聞いてあげる、ということに心がけました。また、子どもの様子を教職員間で共有する、共通理解を図るということも、いつも以上に心がけました。年3回の学級経営研では被災した児童の様子についても報告し合うことを確認しています。

6月25日、およそ1か月遅れの運動会。練習は例年に比べて大変きびきびしたもので、子どもたちの意欲が伝わってくるものでした。目標を持って取り組ませることの大切さをあらためて感じました。もちろん本番も大成功

でした。

7月に入ると子どもたちの様子が少々下向いてきたように感じました。疲れもあるのかもしれませんが、それ以上に、被災した家庭や職を失った保護者、あるいは地域全体が、将来への展望を持ってないでいることが影響しているのではないかと、思います。

子どもと親に寄り添いたい

3月4月は、華やかことにぎやかなことに対する自粛ムードがありました。最近では、元気を出すため出してもらうための催しや子どもが活躍できる場を設けたいとする動き、震災を乗り越えさせるような積極的な指導を進めなければならないという考えが大きくなってきているように感じます。それが悪いことだとは思いますが、しかし、私たちは、みんなが前へ進めば進むほど取り残される人が出るのではないかと、実は静かにしておいてほしいという方の思いは伝わらないのではないかと、ということに危惧しています。

保護者の家庭で犠牲になった方5人の中の1人は、子どもの父親です。まだ見つかっていません。担任の女の先生はその子を注意深く見守っているのはもちろん、それと同時に、様々な機会に母親と話し思いを聞き、一緒に涙しています。私たちはこれからも、子どもの変化を見逃さず、子どもや保護者に寄り添っていきたいと思います。

東日本震災後思うこと

岩手県 親と子・教職員のための教育相談室 七木田 玲子

3月11日

3月11日2時46分・岩手の地は、激しく揺れた。家の中に居られず外に出たが、立っていることがやっとなので、停車していた車に乗って地震がやむのを待った。次々と余震が起り、まるで小船に乗って揺れているようだった。私の地域は、停電になり、ご飯は炊けない、暖が取れない、電話が繋がらない、テレビは見られない。こんなに電気に頼って生活していたのかと改めて感じた。

津波で亡くなった人の中には、町内会の世話役の人や民生委員、水門を閉めに行った消防の人、寝たきりの親を助けようとして一緒に亡くなった親子など・・・言葉にならない無念さが伝わってくる。

被災した人からは、「着るものも食べるものも不自由していないよ。たくさんの人に助けられているよ。」という言葉を目にする。私自身も、大船渡で、京都府警の人に道を聞

き、広田半島では奈良県の給水車が水を、山形県の消防車の救助、復旧・復興の支援に向かう機動隊の車等々、本当に日本全国の人々に助けられていることを肌で感じた。

気仙中学校のこと

1ヶ月経って、かつての勤務校であった気仙中学校に行った。校舎のコンクリートは残っていたが津波で流されてきた残骸が校舎に引っかかっていた。気仙川をさかのぼった津波は、こんな山の中に誰が津波が来ると思うだろうというところまで達していた。

気仙中学校は、対岸には高田松原があり、春には白魚漁の小船が窓から見え、秋には鮭が川を上ってくるのが校舎の窓から見えるような美しい場所であった。不幸中の幸いか、地震から津波までの時間は、40分以上あり、学校にいた子どもたちは山に避難し全員無事であったと聞いた。

被災した人々が、なんとか早く落ち着いて住めるような環境になって欲しいと思った。



気仙中学校

震災後の相談室

震災に関わった相談はほとんどなく、一般の相談の数もいつもの半分くらいの数に減っていた。沿岸部の電話の回線が一か月以上に渡りつながらないという諸々の物理的状況はあったと思うが、何か人々の心の中にも変化が起こったのではないかと思う。

電話相談しながら「日本は、どこへ行き着くのだろう」と漠然と思っていたが、津波に流された人々の様子から今後の生き方を学ぶべきことがあるような気がする。

3月11日勤めに出たまま、何日も会えない家族、生死さえ確認できないような状況が何日も続く不安な日々。そんな中だから大切なものが何かが見えてきたような気がする。

【津波にあった人たち】

- 生きていくということの大切さ（辛さも抱えてはいるが）
- 日常の生活のできる場所があること
- 日常のさりげなく思える生活こそどんなに大切なものか
- 周りの人々に助けてもらうことの大切さ
- 物がなくとも支えあう心があるという心強さ
- 感謝する気持ちの大切さ

【支援に来る人々】

- 被災した人々と思いを共有しようと行動することの大切さ
- つながっているという思いを伝える大切さ
- 一人ではないという思いを伝えられた時の心強さ
- 人に役立つことが自分の生きがいにつながる

日本全国や外国から支援に来る人々から、なんとか被災した人々を支えたいという思いがこの岩手の地に届いている。

こんなにも厳しい環境でなければ、変化し、感じるができなかったのかもしれないたくさんの方のことを、私たちは、被災した人たちや支援に来る人々から感じることができる。

1日も早い収束を

被災した学校は、流されなかった学校に間借りし、高台にある校庭には、仮設住宅が隙間なく立ち、海岸近くの学校の校庭は、瓦礫置き場と化している。それでも運動会などは、隣町の校庭を借りたりしている様子が報道されている。

家を流されたり、家族を失った人々の環境は厳しいけれど被災後の人々が見せてくれた気高い心から学びながら乗り越えていくしかないのではないかと考えている。

福島に思いを馳せながら、早くこの厳しい状況が収束して欲しいと願っている。